



〈研究〉世界經濟の思想と其實現(2)

福田, 敬太郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 33(2):264-288

(Issue Date)

1922-08

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053463>



世界經濟の思想と其實現（其二）

福田 敬太郎

五

理論論的自然法的世界觀の中に浸つて、外に於てはフィジオクラット、内に在つてはヒュームの影響を強く受けたアダム・スミスが如何なる貿易理論を持つて居たかは我々が容易に想像し得るところである。然し我々は少し立入つてフィジオクラットとスミスとの關係を考察し、通常考へられる如くスミスは單にフィジオクラットの英國的模型ではないことを闡明し、彼が英國經濟學の鼻祖と稱へられる所以を知り、且つ彼がマークアンテイリズムを攻撃せし眞の精神を窺ひ、後、彼の反對者として現はれたるジョン・レイの思想と比較研究して、以て愈々スミスの眞面目を發揮せしめやうと思ふ。

『國富論』の使命は利己心の解放であつた。而して此事業に就でフィジオクラットの自然的秩序の思想が根強い刺戟を與へたことは確かである。スミスのフランス行は大學の壁内に蟄居して居た一人物を世間に解放し、當時名聲噴々たる「エコノミスト」達の中に交はらしめ、彼の思索を方式立つることを助け、同時に價值多き事實の蒐集を行はしめ、以て其の理論的勞作に豊富なる材料を供

給した。然し乍らスミスとフィジオクラットとの間に如何なる外面的なる交渉があつたとしても、若し彼が單に彼等の代辯者たるに止まり彼等の言葉を英譯したるに止まるとしたならば、彼のカーカルデイ十年の思索は無意味に終り、彼自身一介の「ブツク・メーカー」たるに止まつたであらう更に眼を轉じて「國富論」の内容に就て見ても、考證家の好んで指摘する如く、其分業論はマンデヴィユに、其價值論はペティーに源を發するものであり、貨銀論にしても價格論にしても或ひはカントンヨン或ひはスチュアート等より勝つてゐるとは云ひ得ないとするならば、此點からスミスは單に一個の「コンバイラー」に過ぎなかつたであらう。よし一步を譲つて打つて一丸としたところに彼の偉大があるとするならば、經濟學は其誕生の剋那から一の搔き寄せ、細工に過ぎないとの嘲笑を甘んじて受くべきであらう。利己心の解放が「國富論」の使命であるとして、又其處にスミスが經濟學の父たる第一の資格を獲たとしても、尙ほ其手段に於て彼は落第の憂目を見るのではないかと怪まれる。

然し乍らスミスの偉大は同化に存するのではなく創造に存する。彼の偉大はフィジオクラシーを吸收したところにあるのではなく、實にフィジオクラシーを再び吐き出したところに存する。彼はフィジオクラットの徒から大影響を蒙つたけれども、決して其れに降參して了はなかつた。嘗てイギリスのマーカンテイリズムを吸收した偉大なるフランスの思想家達が其中に自己を失ふことなくフランス獨自の道を創設したと同様に、フィジオクラシーに接したスミスは其れに耳を傾け乍らも身も心も奪はるることとはなかつた。彼は其れほど弱き性格の持主ではなく、豊かにして正しき優越

感の持主であつたが故に、彼こそは、通常人の考ふところとは反對に、フィジオクラシー反抗の第一人者であり、従つてイギリスに於ける偏狹ならざる眞正の新商業立國主義の主張者の白眉であるのである。

「國富論」全卷を通じて振る思想は利己心の解放であつて其熱は古きマーカンテイリズムに對する反抗の叫びとして最高點に達する。其れは我々が後に研究すべき第四篇第一章乃至第八章に現はれてゐる。けれども我々は此攻撃の鋭さに由つてスミスの本心を見誤つてはならぬ彼が力を籠めて攻めたててゐるものは實に彼が最も熱愛してゐるものである。たとひ彼が意識せずして叱るとしても彼の叱咤に由つて初めてマーカンテイリズムは其眞面目に發揮するやうになつたことは事實である。即ち眞の商業立國主義はスミスの激勵に由つて生育した。然らばフィジオクラシーに反抗して眞正のマーカンテイリズムを覺醒したスミスは再びマンヤカルペバーと同じ「英國人」となるべきであつたか。我々は次にスミスがフィジオクラシーに反抗してゐる事實と、而かも古き地方的なるマーカンテイリズムに復歸せずして世界的なるマーカンテイリズムに己が途を見出した事實とを、僅かに「國富論」第四篇第九章を紹介することに由つて示さうと思ふ。而して其れだけで充分であると信ずる。

六

スミスは此章の劈頭に於て⁽¹⁶⁾、フィジオクラシー（彼は之を農業主義 Agricultural System と呼ぶ）

はマーカンテイリズム（彼は之を商業主義 Commercial System と呼ぶ）ほど經濟政策として注意を拂ふ必要はない、と斷つてゐる。即ち彼はイギリスの經濟政策上根底となるべきはマーカンテイリズムであることを暗に示してゐるのである。彼は前八章に於てマーカンテイリズムを細叙した後、に纔に一章を設けてフイジョクラシーを論じてゐるに過ぎない。若し彼がフイジョクラシーの鼓吹者少くとも其精神の宣傳者であるとならば、此事實は餘りに皮肉に過ぎはしないか。

スミスは云ふ、フイジョクラシーは未だ嘗て實行せられたることなき空理であつて、フランスの思想家達の思索的產物たるに過ぎない、又フイジョクラシーは一の反動的學說であつて、一方に枉がつた杖を直くする爲め反對の方向に曲げ過ぎると同じく、フイジョクラシーは偏してゐると。スミスの求めて居るものは實に正しき直き杖であつた。古きマーカンテイリズムを棄てて而かもフイジョクラシーの新奇に走ることなく、イギリス百年の長計の爲めに直き靈杖を探し求め其れを若きビットに與へたところに彼の偉大が存する⁽¹⁷⁾。

スミスはフイジョクラシーの社會三階級説を紹介したる後直ちに其不生産的階級 (the barren or unproductive class) と呼ばれるところの職人・製造業者及び商人を擁護する議論を掲げる。不生産的階級は單に有用なるばかりでなく他の二階級に取つて必要缺くべからざるものであると云ふスミスの心には既に第三階級の勃興が豫想されてゐた。次の一言は正に彼の社會觀であつて其處に分業の大精神が現はれてゐる。曰く、「商人・職人及び製造業者の勤勞は其れ自身の性質に於て全然不生産的であるとしても間接に土地の生産物を増加することに寄與する。彼等の勤勞は生産的勞働をして

専ら其本來の仕事即ち土地の耕作に自由に従事せしむることに由つて生産的勞働の生産力を増加する。而して其仕事は耕作から隔たること甚だしき人の勞働に由つて耕作は屢々益々容易に愈々良好に行はるゝ⁽¹⁸⁾と。斯くしてフイジオクラットの徒が土地に偏したる自然的秩序の觀念を懷いてゐる間に、スミスは全社會を基礎とする眞正の自由公正論を唱へ出したのである。即ち云へらく、「完全なる正義、完全なる自由、及び完全なる平等の樹立は三階級全體に最高度の繁榮を最も有効に保證する極めて簡單な秘訣である⁽¹⁹⁾と。自由・正義・平等の樹立に由つて全社會が繁榮に趨き、分業の理法に由つて各階級は相互に依屬し、斯くて社會的福利が増進するに至るものであるに拘らず、フイジオクラシーは其理を辨へずして商工階級を全く不毛であるとして社會的寄生物の如くに取扱ふ。フイジオクラシーに存する諸々の缺點の中此れ最も根本的なものである。たとひ一階級の生産力が他の階級の生産力に勝つてゐるとしても、其れを以て直ちに後者を不生産的として輕蔑してはならない。加之、商工階級は其れ自身既に生産的であると解することが出来る⁽²⁰⁾。斯くの如くスミスは商工階級に社會的存在の理由を與へると共に、進んで貿易の重要を高唱してマーカンティリズムの本義を發揮したことは後に説くところに屬する。

さてスミスはフイジオクラシーの缺點を充分に指摘したる後徐ろに其價值を認めて言ふには、「此主義は、然し乍ら、其の總ての不完全を以てしても恐らくは嘗て經濟學の主題に就て公けにせられたもののうち最も眞理に近きものであり、且つ其故に此重要な學問の原理を注意して吟味せんとする何人の考慮にも充分價するものであらう⁽²¹⁾と。實にスミスはフイジオクラシーに盲信しなかつ

ただけに其眞價を正しく捕へ得た。フィジオクラシーが國富を貨幣の如き消費することの出来ないものであるとせずして年々の勞働に由つて再生産し得且つ消費し得るものとしたこと、及び國富を増進する手段は唯々自由の確保にあることを説いたことに共鳴したけれども、價値の源泉を土地にのみ求め農業に固執せることに慚らず感じ、スミスは其眼光を廣く經濟界全般に注いだ。單に農業上に存する自由に對する障礙を排除することで満足せず産業上の一切の束縛を打破しやうと試みた。彼が次の言葉を吐いたときに彼は眞に時代精神の魁をなした者であつて、經濟的自由の宣言を行つた者である。曰く、「特典並に制限の總ての制度が、其れ故に、斯くして完全に除去される」とき明白にして簡單なる自然的自由の制度が自ら樹立する。各人は、彼が正義の法則を侵さざる限り、彼自身の利益を彼自身の方法で追求し、且つ自己の勤勞と資本とを他の個人又は團體の勤勞及び資本と競争せしむべく全く自由に放任せられる⁽²²⁾と。

思ふにフィジオクラットの徒が唱へた自由貿易論はフランスの農業保護を目的とする古きマーカントイズムの一變態である。例へば一七五四年デュ・パン等四人の穀物自由貿易を要求し、又は一七五五年エルベールが「穀物政策論」(Essai sur la police des grains)に於て自由輸出論を唱へたる如きは、フィジオクラシーの根本觀念たる自然的秩序に基くと云ふよりは寧ろ具體的な目前の利害から打算したるものであつた。イギリスのマーカントイリスツが英國本位の立論をしたと同様にフランスの自由貿易論は佛國本位、殊に佛國農業本位の立論であつた。此點に於ては、利害相反する兩國のことであるから其装ひこそ互に違ふけれども、精神の狹隘なることは全然同様である。是

れフランスの自由貿易論者若くはフイジオクラットの徒に經濟學の創設者たる名譽を負はしめ得ざる理由である。茲にも皮肉なる齟齬がある、即ち自然的秩序と云ふ美はしき理神論的自然法的世界觀をフイジオクラットの徒は自ら持ち乍らも其れを國內に於ける富の流通に制限し、世に經濟の廣きに適用することなく、其役目を一介の旅人に委せて了つたと云ふことである。自由貿易の理論が自然的秩序を基礎として説かれたのはスミスに由つてゐる。スミスは、恰かもカンチオンが商業一般(Le commerce en général)を論じたやうに、諸國の富(Wealth of nations)を説いた。此れ實に彼が古きマーカンテイリストと選を異にせる所以である。彼はイギリス固有の商業立國主義を眞正の装ひのうちに整へ、理神論的自然法的世界觀の下に其れを萬國共有の思想的財産とした。彼の自由貿易論は、其れ故に、自國の小麥を自由に輸出せんと企てに過ぎざるフランスの自由貿易論と異なり、更に深き世界觀の根底を有するものである。茲に逆意的形容が許されるならば、スミスは一の「フイジオクラティック・マーカンテイリスト」である。而して彼が經濟學の父と呼ばれる理由の一は此處に存する⁽²⁸⁾。

七

然らばスミスは當時の、彼の言葉に従へば「近世的制度にして我國に於て又現時に於て最もよく知られたる」マーカンテイリズムを如何に理解し又如何なる點に於て論難したか。此れを知ることにはやがて彼の抱懷する大精神を悟ることである。

スミスは古きマーカンテイリズムの誤謬を貨幣の職能に關する誤れる見解から生ぜるものとした²³⁾。即ち各國は金銀を真正の富であると考へ富國たる爲めには出來得る限り國內に金銀を蓄積すべきである。信じて競つて金銀の輸入獎勵輸出禁止を行ひ來つた。然るに諸國間に商業の發達するに伴ひ此禁止制度は商人の不便を醸すに至つた。彼等は他の商品を以てするよりも、銀を以てする方が遙かに有利に外國品を購ひ得る場合がある故に、金銀輸出禁止の制度を貿易に害ありと叫び出した。其處で彼等は國際貿易の利益と金銀密輸出の可能とを説いて禁輸解除を政府に迫つた。此代表者はトーマス・マンである。

スミスに依れば此商人達の議論は一半は正しく一半は正しくない²⁴⁾。即ち彼等が金銀の輸出は屢々一國に利益であり、又其利益ある限り輸出禁止は不可能であることを説く場合は正しく、彼等が一國に必要な以上に金銀を増加し得と考へ、又爲替相場の高きは必ず所謂逆なる貿易均衡を生じ金銀の輸出を起すと信ずる場合は正しくない。此正否共存せる議論が商人に由つて唱へられ議會を動かすに至つた。而して此貿易均衡論は採用せられ、先づフランスとイギリスに於ては金銀の輸出禁止を自國の鑄貨に限り他國の鑄貨及び一般の地金銀に就ては解禁し、更にオランダ其他に於ては自國の鑄貨の輸出をすら解禁した。茲に於て政府の注意は専ら貿易の均衡に向けられた。然し乍ら此は畢竟一の無駄の心配から他の無用の苦心に移つたに他ならず、目的は依然として誤れる貨幣觀から生ずる金銀尊重に存する。

誠に國內に鑛山を持たざる國が金銀を獲るには外國貿易に依らねばならぬことは、國內に葡萄畑

なき國が葡萄酒を求むるに外國貿易に由ると同様である。然るに一方は政府の注目を要し他方は然らずと云ふ理由をスミスは發見し得なかつた。金銀も亦商品である。故にスミスは信ずる、自由なる貿易は、政府の注意を要せずして必要な葡萄酒の供給を致す如く、一國に必要な金銀の供給を致すものである。所謂貿易均衡論が金銀の出入にのみ腐心するは故なきことである。況して金銀の出入ほど容易なるものはない。總ての商品の供給額は其れに對する有效需要に由つて決定せられるが、金銀ほど容易に然かせられるものはない。其れ故に金銀は有效需要の存するところへは其完全なる移動性に由つて流るゝが如く飛ぶが如く移動する。金銀の相場が如何なる場所に於ても大なる開きを示さないことは此理由に據る。斯くの如き金銀の出入は政府の注意を少しも必要としない。

スミスは貨幣の職能を説きたる後貿易の利益が金銀の輸入に在るのではなく、國內に於て必要な生産物を海外に送り出し其れに對して國內に需要あるものを齎し來るに存することを論ずる⁽²⁷⁾。即ち貿易は財の交換價值を大にする。貿易に由つて財は狹隘なる國內市場から廣大なる世界市場に移り、總ての産業は完全に分業の利益を享受し得る。アメリカの發見がヨーロッパを富ましめたるは金銀の供給に由つてではなく市場の擴張に由つてである。金銀の供給は寧ろ其價值を下落せしめ貨幣としての職能を盡すに不適當ならしめた位である。之に反して新しき交通が始まり、特に希望峰を廻つて東インドに達する航路の發見せられて殆ど全世界的なる市場が成立したことは、確かにヨーロッパ諸國の經濟的地位を高める基礎と成つた。

然るに此事情を洞察せず却つて金銀を國富の要素なりと信じ其金銀を無限に増加する爲めに貿易均衡を願ならしめんと劃策するものが實に古きマーカンテイリズムである。曰く、輸出獎勵。曰く輸入制限。此標語の下に行はれるところの一切の政策をスミスは有害無益なりとした⁽⁸⁾。凡そ社會の産業一般は其社會が用ひ得る資本に由つて限定せられる。商業上の規則命令に由つて社會の産業を現存の資本を超えて擴張することは出来ない。資本の一部を取つて一産業から他の産業に移轉し得るとしても其れは決して社會の産業一般が進歩したことにはならぬ。却つて斯かる人爲的な資本移轉は自然的なるものに比べて社會全體の利益を減殺するものである。各個の企業者は自己の支配し得る資本を最も利益多きやうに用ひ、其場合彼が着眼するところの利益は社會の利益ではなく實に彼自身の利益であるが、彼自身の利益の研究は自然に又必然に彼をして社會に取つて最も利益ある仕事を選ましめる。即ち第一に彼は利潤率に大差なき限り彼に最も近接せる自國産業に投資し從つて自國産業の維持に貢獻する。如何なる場合に於ても産業を獎勵するものは政府ではなく産業自體に存する利潤である。各企業者が外國産業に向ふ代りに自國産業に向ふことは彼自身の收益追求に就ての判斷に基く。而して一の自國産業を最大の價值あらしむるやうに經營するに際し、彼は彼自身の利益のみを考へ乍ら、しかも此場合他の多くの場合と同様に、彼の夢想だにせざりし一の目的を促進するやう或る見えざる手に由つて指導せられる。彼が其目的を意識せざることは社會に取つて害とならぬ。彼自身の利益を追求することに由つて彼が現實に其れを促進せんと意志する場合よりも遙かに有效に社會の利益を増進する。

利己心を基礎とする經濟的自由をスミスは呼んで「自然的自由」(natural liberty)⁽²⁰⁾と云ふ。彼は此自然的自由が侵害せられる一切の制度を排斥した。國家の職能として此自然的自由を侵害せざる範圍の任務は、例へば正義の擁護、國家の防衛、公共事業の經營の如き之を寧ろ當然のことゝ考へた。然し此自由を侵害する限りは常に國家的干涉のみでなく他の法人的組織の暴威をも極力攻撃した。彼が個人の自由を無視する株式會社の如き集合的經營を忌避し、獨占的傾向に陥りて自由競争を杜絶せる多くの植民地貿易事業を非難し、就中東インド會社を彈劾したことは此理由に基く。

當時イギリスに於てはフランスに於けると異なりて幸にも内國取引は比較的自由であつた。農業上、工業上、若干の古き制度の遺物が残つて居たけれども、内地商業に障礙を與へるほどのものは殆ど無かつた。然るに外國貿易に就ては尙ほ多數の煩雜なる制限束縛が存在して居たのである。茲に於てスミスは前述の大精神の下に古きマーカンティリズムを攻撃するに至つた。「國富論」が時人を驚かしたのは、分業論に由つてよりも、自由貿易論に由つてである。而してスミスの意志は結局國際貿易の中に自然的自由を確立することにあつたことと言ふまでもない。此の美はしき願望に動かされてなされた自由貿易提唱は其理論的根據を「産業は資本に由つて限定せらる」との有名なる命題に置き保護の有害無益なるを説くことを第一の任務とし、更に國際的分業と國際的交換の利益を明かにすることを第二の任務とした。然し乍らリストも指摘せる如く⁽²¹⁾、スミスの貿易理論は精神に於て雄大であるだけに思案に於て粗奔なる點が無いではない。スミスに於て果して利潤の極大と幸福の極大とが區別せられてゐたであらうか。自由競争の下に於て資本が運用せらるゝ方向は利

潤の極大を指し、決してスミスの念頭を離れざる人類の幸福の極大ではない。又スミスは單純に國際的分業の利益を信じて居るが、國際的分業が完全に行はるゝ爲めには勿論資本と勞働との自由なる國際的交通を重要な前提條件とするものであるから、實際上國際間に於ける資本と勞働との交通は國內に於けるほど自由活潑に行はれ難き事情ある以上、彼の單純なる期待は頗る基礎薄弱であると言はねばならぬ。換言すればスミスに於ては未だ産業の分布が絶對的生産費に由つてではなく相對的生産費に由つて決定されるものであることは確認せられなかつた。此れを展開した功績はリカードに存する。

スミスは己が一の理想を語る者であることを自認して居た。彼は現實に對して餘り大なる希望を懸けてゐなかつた。彼は考へた、「實際、貿易の自由が一度たりとも大英國内に完全に樹立せらるゝを期待することは、其處にオセアナ若くはユトーピアの理想郷の建設せらるゝことを期待すると同様沒理的である。嘗に公衆の偏見のみならず、更に征服すべからざることは多數の個人の私的利益が之に極力反對する」と我々は今此告白をスミスから聽くことを寧ろ怪む。幸にして事實は彼の豫想を裏切つて第十九世紀のイギリスは自由貿易の理想郷を殆ど完全に樹立した。然しスミスの此悲觀を思ふとき當時の大勢と彼の大膽さとを推し測ることが出来る。

八

アダム・スミスが理神論的自然法的世界觀の中に經濟的自由主義を樹て自由貿易論を唱へた巔末

は既に見た。實に世界經濟の思想は此處に確立したのである。リカード及びミルの展開したる所謂正統學派の國際貿易の理論は此機械的自律的世界觀を基としてゐる。然るに既に夙くジョン・レーに由つて此れに對する根本的批評が加へられた。其處で我々はリカード及びミルの國際價值論を取扱ふに先つてスミスの自由貿易論に對するレーの態度を窺つて見やう。

レーが經濟生活の本質を道破したることに就ては福田博士が審かに説いて居られる故⁽⁸²⁾、屋上更に屋を架するの愚を敢てしないが、此處に特に注意すべきはスミスの對立者としてのレーの意義である。換言すれば機械的自律的世界觀に對して擧げられたる自由意思を根據とする創造的生命的世界觀の叫び聲に耳を傾けることである。固よりレーの著書の標題「經濟學の主題に關する若干の新原理の敘述」「國富論」に現はれたる自由貿易論其他の學說の誤謬の指摘⁽⁸³⁾の故を以て直ちに彼をスミスの對立者なりとするならば恐らくはミックスターは其非を難するであらう。即ちミックスターは「資本の社會學的理論」に序して次の如く言ふ⁽⁸⁴⁾。

「此標題は錯稱なりき。蓋し本書の主要部分はアダム・スミスの學說に關する論評にあらずして寧ろ資本の一般的主題に就ての獨立にして巧妙且つ深遠なる論述なればなり。斬新にして有力なる方面に於てポエーム・バツェルクの開始せる世界的に行はるゝ資本に關する論争に關聯してレーが最近に至り現代經濟學者の注意を惹くは後者の故に由る」⁽⁸⁵⁾。

然り、レーの眞相と價值とが明かに成つたのは此理由に基くことを我々は認める。けれども我々が今一度考へ直すときに、ミックスターが此標題を「ミスノーマー」なりと斷定し更に全篇の結構

までも改めて「資本の社會學的理論」と呼ぶことは果して何處まで正當なる行爲であらうか。現代の中心問題は「資本」であり其「社會學的説明」を要求してゐることは確かである。然し乍らレーは果して現代の注文に應ずる爲めに「經濟學の新原理」を豫め樹てんとしたのであらうか。

然らず、レーの當面の問題は彼の時代に於ける經濟學に新局面を開くにあつた。而して其道を彼はスミスの學說に存する誤謬を訂正することに見出したのである。レーの思索の徹底せる、其理論の整然たる、期せずして當面の問題の解決以上に走り其餘光尙ほ今日まで及ぶものあることは、決して彼の初志を變せしめる所以でもなく、況んや今日我々が彼の初一念を輕視することを可とする理由とはならぬ。此の意味に於て我々は學說史上レーの原稱をミックスターの新稱よりも興味あるものと解し、且つ其内容に觸れて愈々原稱こそレーの眞意を表はすべきものなることを知るのである。

レーは從來の方法に由つて富の研究に従事した。而して富の本質を理解せんとして遂に期待せしところに達せず、失望の後更に勇を鼓して新しく獨自の途を歩み出したのである。レーの思索の進むと共にスミスの誤謬に棄て置き難きものあることを發見した。ミックスターが本書の大部分を以てスミスの學說に關與せざる獨立のものであると觀じたるにも拘らず、レー自身は最初全くミックスターと反對の決心を以て筆を下したのである。即ち彼は序文に於て次の如く公言してゐる。

「予は既に夙く『國富論』及び諸經濟學者の思索の助けを惜れり。然れども予は予の豫期せし程度に於て予の目的を達せんには彼等の範圍並に計畫の甚だ限られたることを發見せり。……予は予

の地位の許す限り予に取りて甚だ潑瀾たる興味を有する研究の歩を進めんとのみ只管なる其願望より此研究に従事せしが、予の研究の進行と共に「國富論」に示されたる理論の不完全なることの確認を益々深く印象せらるる結果と成れり。……論述の進行に於て殆ど全く予は「國富論」に示されたるままなる予の反對する學說の考察にのみ限れり。予は矛盾・衝突せる諸意見の紛争中に巻き込まれることなくして他の途を探ること能はざりしなり」⁽⁶⁾。

尙ほ我々がレーの緒論を讀むときにも彼の此意氣込に接することが出来る。レーはスミスと其學派の研究原理に存する重大なる根本的缺陷は説明を必要とする其當のものを以て其物を説明せんとする傾向之であると斷言した⁽⁷⁾。スミスが國民の富 (national wealth) と個人の富 (individual wealth) との起源に就て區別を設けず、兩者共に蓄積 (accumulation) に由つて成立するものであると考へることを非難し、スミスの富の觀念を疑つた⁽⁸⁾。個人の富は蓄積又は獲得 (acquisition) から生ずるかも知れないが、國民の富は常に創造 (creation) 又は發明 (invention) から生ずるものであると説くことがレーの主眼である。

「發明は創造すと言ひ得べき地上に於ける唯一の力なり。凡そ國富増進の過程は創造にして獲得にあらずる故、發明は國富増進の過程に重要な要素として入り来る。……個人の追求する目的と國民の追求する目的とは異れり。前者の目的は獲得にして後者の目的は創造なり。兩者の用ふる手段も亦異れり。勤勉と節儉とは個人の資本を増加す。然れど全國民の富と云ふ其最大最眞の意義に於ける國富は發明的才幹の力をも借るに非ずんば増加する能はず」⁽⁹⁾。

スミスは國富の増進を勞働の成果と其貯蓄に由つて可能なりと考へた。此れはベテイー乃至カンチヨンに由つて唱へられてゐた「土地と勞働」の兩生産要素説の一展開であると共に、スミスが其説を是認した根據にはフイジオクラシーの土地尊重論に對する反動としての勞働高揚論とフイジオクラシーの根本思想たる自然的秩序の觀念とがある。スミスは自然を機械的に理解した。勞働生産物の所産が即ち資本であると云ふ思想は、雨水が溜つて池と成ると云ふ考へと同様、機械的自律的世界觀の產物である。レーは此處に不服を持つてゐた。レーは、個人的富に就ては暫く措き今スミスの研究せんとする國民的富に就ては決して斯くの如き機械的法則が作用してゐるとは考へられず、と叫び出した。謂はば機械論に對する生命論、運命決定論に對する自由意思論を唱へ出したのである。レーの卓見は此處に存する。創造と發明とはレーの生命である。

此點を更に強く印象付けられる爲には分業論に對するレーの批評を讀めばよい。スミスに依れば分業こそ一切の發明改良の根本である。此れはスミスの機械的自然觀に應はしき思想である。分業は發明の父であり従つて資本の源であるとの立言に默して居られなかつた者はレーであつた。即ち彼は分業の前に發明がある。故に發明こそ資本の起源であると言つた⁽⁴⁰⁾。而してレーの所謂第一動力 (prime mover) とは發明である。分業の行はるところ發明も亦盛んであらう。然し其の盛んなことは分業の結果にあらずして、其れ自ら分業を起すところの他の原因の結果である。即ち發明の行はるるは發明力の結果である。レーの精神躍如として此處に現はれてゐる。發明的精神が全生産組織を向上せしめ又全經濟社會を動かすところの資本を構成する。之を勞働の分割と云ふ生産行

程の機械的形態的變化から經濟的進歩が生ずると觀たスミスの機械的自律的世界觀の思想に比すれば甚だ軒致あることを知る。

レーはスミスの空想的なる自然的自由の制度に満足するには餘りに現實に眼を開き過ぎてゐた。レーは個人の利益追求に委ねることに由つて社會的幸福が獲得せられ得ると信ずることは出來ず、従つてスミスの自由貿易論を受け入ることは出來なかつた⁽⁴¹⁾。爲政者は新しき技術を移入して發明を刺戟するにあらざれば國富を増進し得ない。保護の手段に由つて發明が刺戟せられる、とはレーの胸奥に藏せられた意見であつた。

九

第十八世紀に於け成熟せる理神論的自然法的世界觀の下に世界經濟の思想が著しき展開を遂げたことを我々は既にヒューム及びスミスを通じて見た。其處に現はれた世界經濟の思想はジョン・レイに由るが如き有力なる根本的批評ありしにも拘らず正統的經濟學の主潮の中に自由貿易の理論として現はれて來た。既に述べた如くスミスに於ては自由貿易の理論的解明は尙ほ未だ完からず後進諸家の頭腦を用ふべきもの少くなかつたのである。然れば此方面に於て更に奥深く探究することは第十九世紀に於ける經濟思想家に残されたる任務であつて、其任務の履行に由つて英國經濟學の正統を繼承することが出來た。即ち自由貿易の理論として國際價值の原理を最初に樹立した者は實にデヴィッド・リカード其人である。

リカードの國際價值論 先人未踏の思林に初めて入り込んだばかりでなく彼以後に於ても再び彼の足跡を充分に追蹤し得た者は甚だ少く又彼以上に出でたる探索者はジョン・スチュアート・ミルを除いて殆ど見當らないほど經濟思想史上重要なものである。殊に相對的生產費説と貨幣水準説とはミルに比して優るとも劣ることなき明快さを持つてゐる。固よりリカードの演繹的獨斷的方法は屢々非難の的となるが⁽⁴⁾、其れだけ彼は理論的銳さに於て何人をも凌駕してゐる。其精細緻密なる解剖は數式計算に於けると同様の注意を要し、其複雑多岐なる論構は論理學的演習に従事するの感を起さしめる。然し此論理的堅城の中に在つてこそ完成せられたる彼の國際貿易の理論は爾來拔くべからざる勢力を保持しつつイギリスの自由貿易主義の指導原理と成り得たのである⁽⁴⁾。

リカードは「原理」の第七章に於て外國貿易に就て特別の解説を企てた。云ふまでもなく彼の價值論・利潤論・貨幣論等を理解することなくして外國貿易論のみを會得することは出來ず、又彼の商業政策・植民政策に觸るることなくして外國貿易論を遺憾なく聴くことは出來ないけれども、今は主として第七章を中心として彼の自由貿易思想を窺ひ必要に應じて諸篇に亘つて意見を尋ねることとする。

スミスの力説した利己心の原則はリカードに於ても保守されてゐる。即ちリカードも亦其經濟理論の根底に理神論的自然法的世界觀を有する者である⁽⁴⁾。彼は曰く、

「完全なる自由貿易制度の下に於ては各國は自然に其資本並に勞働を自國に最も利益多き職業に用ふる。此各個の利益追求は幸にも全體の普遍的福利と結合して居る。勤勉を勵まし、巧智に酬ひ、又自然の與へし特殊の力を最も有効に用ふることに由つ

て、自利追求は勞働を最も有効に且つ最も經濟的に分布する。斯くして生産の全額を増加すること由つて一般の利益を増進し、又利益と實際との共通の紐帶に由つて文明諸國全體の全社會を結合する。葡萄酒がフランスとポルトガルにて造られ小麥がアメリカとポーランドにて作られ、又金物其他の財がイギリスにて製せられるは實に自利追求の原則に由る⁽⁴⁵⁾と。

若しリカードにして此れ以上の發言をしなかつたならば、此處に我々は彼を挙げ來る必要はない蓋し此は既にスミスに由つて、更に遡つてヒュームに由つて道破せられたところに他ならぬからである。我々がリカードに聽く所以は彼が進んで貿易理論の内容を豊富にしたが爲めである。即ち諸國間の貿易が絶對的生産費に由らずして相對的生産費に由つて左右せられると解明したことは確かに世界經濟の思想に對する一大貢獻である。

リカードに據れば、一國內の利潤は大體平均し、若くは資本運用の確實さと適當さとに應じて多少相違するに過ぎないが、國際間に在つては然らず。或る國が他國の產物に對して與ふる自國產物の量は國內に於ける場合の如く各生産に投せられたる勞働量に由つて決定せられるものではない。今イギリスに於て一定量の布を生産するに百人一年間の勞働を要し、葡萄酒を造るに百二十人一年間の勞働を要すと假定し、又ポルトガルに於て布を織らば九十人一年間の勞働を要し葡萄酒の生産に八十人一年間の勞働を要すと假定する。然るときは英は布を輸出して酒を輸入し、葡は之と反對に布を輸入して酒を輸出することを利益とするであらう。斯くの如き交換は葡に輸入せらるる布が同國に於て英に於けるよりも少き勞働を以て生産し得る場合にすら尙ほ且つ起る。即ち葡は布を織るに九十人の勞働を以て足るに拘らず此れが生産に百人の勞働を必要とする英から其輸入を仰ぐで

あらう。何となれば葡に取つては布の生産に用ふる資本を酒を造るに用ひ、其を輸出して英から布を輸入する方が自ら織るよりも多くの布を得ることが出来るからである。

即ち右の例に於て（一）各別生産の場合には英にて布の爲め百人、酒の爲め百二十人、計二百二十人の勞働を要し、葡にて布の爲め九十人、酒の爲め八十人、計百七十人の勞働を要し、合計三百九十人の勞働を必要とするが（二）兩國分業の場合には英にて二倍の布を生産するとして二百人、葡にて二倍の酒を造るとして百六十人、合計三百六十人の勞働を必要とすることになる故に、差引兩國が貿易に依つて得るところの利益は三十人の勞働量に相當する。尤も此の利益が兩國間に如何なる割合を以て分割されるかに就てはリカードは言及して居らぬ。此問題に觸れた者は後に述ぶる如くミルである。

何故に然らば國際間には絶對的生産費の原則が行はれずして相對的生産費の作用が生ずるか。此れは國際間の資本及び勞働の移動が國內に比して困難であることに歸する。即ち資本を自己の直接管理の下に置かざる場合に存する想像上又は實際上の不安と何人も故國を離れて異れる風俗習慣の下に身を置くことと厭ふことと相結んで資本及び勞働は國際間に自由に移動しない。固より證券資本制の發達と交通機關の進歩とに伴ひ資本及び勞働の國際的移動は漸次容易になり安全となつた。隨つて現代の世界經濟の思想の内容としてリカードの相對的生産費説をそのまま受入れることは躊躇せねばならぬ。然し乍らリカードの時代に於ける貿易理論として相對的生産費の作用を認識したことは確かに卓見であることを許さねばならず、又今日と雖も尙ほ世界經濟が國民經濟の單なる擴

大にあらすして其間幾多の障礙あるべきことを悟らしむる效果あることも認めねばならぬ。

相對的生產費説と相並んでリカードの貿易理論に於て注意すべきものは貨幣水準説である。然し相對的生產費説に就ては貨幣水準説に關してリカードは獨創を誇り得ない。寧ろ後者に就てはヒューム以後の發展を結集大成したと云ふことに功績がある。即ちリカードの貨幣概念の研究に由つて明かなる如く⁽⁴⁶⁾、彼は、流通の一般媒介物として選ばれたる金銀は商業競争の結果、未だ斯かる金屬存在せずして國際商業が純然たる物々交換の状態に在る場合に於て起るべき自然の交通に適應する如き割合を以て諸國間に分配せられるものである、と考へた⁽⁴⁷⁾。其意味は貨幣の存否に拘らず國際貿易の原理は不變であると云ふことである。貨幣も亦國際間に於ては商品として取扱はれる。

英の布が葡に輸入せらるゝは其布が英に於けるよりも葡に於て多額の金銀を支配し得るからである。又酒は葡に於けるよりも英に於て多額の金銀と交換せらるゝのでなければ英に輸入せられない。若し純然たる物々交換に依るときは、英が布を輸出し酒を輸入するは、酒を造るよりも布を織る方が同量の勞働を以て多くの酒を獲得し得る状態に在る間のみ行はれる。今假りに英に於て酒の新釀造法が発見せられ之を輸入するよりも自國に於て製造する方が有利と成つたとすると、外國貿易は直接間接二方面から影響を受ける。即ち(一)英は輸出の爲めにする布の生産を止め酒の製造を始めから其れだけ貿易は縮小せらるゝに至る。次に(二)斯かる變動があつても暫くは英の布は依然葡に輸出せらるゝ。何となれば布の價格は英に於けるよりも葡に於て高いからである。然るに今や英が布に代へて得るところは酒にあらすして貨幣である。茲に於て貨幣は英に蓄積し葡に減少する結

果兩國に於ける布の價格に影響を及ぼし、英の布の價格は一般物價と共に騰貴して其輸出を有利とせざるに至る。即ちリカードの貨幣水進説の示すところは、正貨の國際的分布は各國の産業の實力に應じて、國際間に相對的生産費の理法が完全に行はるゝやうになされる、と云ふことである。従つて國際間の貿易は常に相對的生産費が基準であつて貨幣が其に伴つて移動する。相對的生産費の理法を無視して人爲的に貨幣を束縛せんとし其手段として貿易を用ふることは全然本末轉倒せる次第である。故に世界諸國民間の貴金屬の分布狀態を變更せんと欲するならば相對的生産費の關係の變動を圖るべきである。其最も良き途は一國に於ける機械の發明、製造法の改良の如きである。此等に依らずして貿易關係は動き得ない。發明は歡迎すべし、而して貿易は自由なるべし、此れリカードの根本精神であつた。

註 釋

(14) フィシオクラットとスミスの關係に就ての我國に於ける文獻史的研究には高橋誠一郎氏の考證がある。改造四ノ三所載參照。

(15) 拙稿・經濟學の發端リシャル・カンチヨン・第一節參照〔本誌第二十九卷第四號〕

(16) W. of N. ed. by Edwin Cannan. II. p. 161.

(17) Cf. Cunningham, Growth of English Industry and Commerce. Modern Times. Part I. pp. 596-597.

(18) W. of N. II. p. 167.

(19) W. of N. II. p. 172.

(20) W. of N. II. p. 172 sq.

(21) W. of N. II. p. 176.

(22) W. of N. II. p. 184.

(23) 何故アダムスミスは經濟學の父と呼ばれるかに就て考察すべき他の一面は「國富論」と「道德感情論」との關係であるが本篇に於ては此點に觸れない。

(24) W. of N. I. p. 335.

(25) W. of N. I. p. 396 sq.

(26) W. of N. I. p. 400 sq.

(27) W. of N. I. p. 413 sq.

(28) W. of N. I. p. 418 sq. "The general industry of the society never can exceed what the capital of the society can employ. No regulation of commerce can increase the quantity of industry in any society beyond what its capital can maintain. It can only divert a part of it into a direction into which it might not otherwise have gone; and it is by no means certain that artificial direction is likely to be more advantageous to the society than that into which it would have gone of its own accord.

"..... Every individual is continually exerting himself to find out the most advantageous employment for whatever capital he can command. It is his own advantage, indeed, and not that of the society, which he has in view. But the study of his own advantage naturally, or rather necessarily leads him to prefer that employment which is most advantageous to the society.

"..... He generally, indeed neither intends to promote the public interest, nor knows how much he is promoting it. By preferring the support of domestic to that of foreign industry, he intends only his own securi-

ty; and by directing that industry in such a manner as its produce may be of the greatest value, he intends his own gain, and he is in this, as in many other cases, led by an invisible hand to promote an end which was no part of his intention. Nor is it always the worse for the society that it was no part of it. By pursuing his own interest he frequently promotes that of the society more effectually than when he really intends to promote it.”

(29) W. of. N. II. p. 184.

(30) Gide et Rist, *Histoire*. p. 116.

(31) W. of. N. I. p. 435.

(32) 鹽田博士・鹽田博士・三田眞次郎。

(33) John Rae, *Statement of some New Principles on the Subject of Political Economy, Exposing the Fallacies of the System of Free Trade, and of Some other Doctrines Maintained in the Wealth of Nations*. Boston 1834.

(34) ハーの原著が標題の宜しきを得たる爲め人々の注意を惹かず不幸なる境遇に沈んだと云ふの『ミックスターが次の如く改題一篇を續けて再刻した。Charles Whitney Mixer, *The Sociological Theory of Capital. Being a complete reprint of the New Principles of Political Economy, 1834 by John Rae*, New York, 1905.

(35) Mixer, op. cit. Editor's Preface, XV.

(36) Mixer, op. cit. Author's Preface. XIV sq.

(37) Mixer, op. cit. p. 1.

(38) Mixer, op. cit. p. 379.

(39) Mixer, op. cit. p. 386.

- (40) Mixer, op. cit. p. 242.
- (41) Mixer, op. cit. p. 421 sq.
- (42) リカードの外國貿易論に就て徹底的批評を下せるものとしてはカール・ディールを挙げるものが出来る。Karl Diehl, Sozialwissenschaftliche Erläuterungen zu David Ricardos Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung. II. Teil S.326-S.411.
- (43) 國際價值論の數學的説明としてはマッギンズの試みたものが典型的である。Edgeworth, The Theory of International Value. (The Economic Journal, Vol. 4, No. 13, 15 & 16. 所載)。
- (44) 此點に就てリカードの論敵たりしマルサスは異なる世界觀の持主であることを注意したい。本稿に於てはマルサスの世界觀に觸れる機會は無い。
- (45) Ricardo's Works edited by Mc.Culloch pp.75-76.
- (46) 拙稿「リカードに於ける貨幣概念の發達」(本誌第三十一卷第一號所載)。
- (47) Ricardo's Works. p. 77.

(未完)